

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

<実践記録> 保育・教育学演習?・?(保育学)における実践報告 : エプロンシアター作成から保育園での実演まで

著者	関根 久美
雑誌名	川口短大紀要
巻	31
ページ	171-177
発行年	2017-12-25
URL	http://id.nii.ac.jp/1354/00001129/



保育・教育学演習Ⅰ・Ⅱ（保育学）における 実践報告

— エプロンシアター作成から保育園での実演まで —

関 根 久 美

1. はじめに

(1) 本授業の目的

- ・ 児童文化財についてそれぞれの特徴，作成方法，実践方法を理解する。
- ・ 実習や現場で対応できる実践力を身につける。
- ・ 行事や文化継承における「保育者の専門性」を高める。

(2) 本実践の概要

保育・教育学演習Ⅰ（1年生後期）においては，その授業のほとんどをエプロンシアターの作成にあてた。保育・教育学演習Ⅱ（2年生前期）の授業においては，「社会福祉法人優愛会西川口くまさん保育所」でのエプロンシアター実演とその反省に4回の授業をあてた。

(3) エプロンシアターとは

エプロンシアターは胸当て式のエプロンをシアター（舞台）に見立て，話の背景を縫い付け，演じ手がポケットから人形を取り出してストーリーや歌を演じる児童文化財である。1979年に中谷真弓が子どもとの触れ合いの中から考案，発表した。基本的には演じ手は一人で，ナレーター，登場人物すべてを演じ，ストーリーを展開していく。エプロンと人形の両方に面ファスナーがついているので演じながら必要に応じてエプロンに人形をつけたり外したりしながら楽しむことができる。エプロンのポケットから次々と物語のキャラクターが飛び出してくることで，子どもたちの驚きと興味を引き起こす。また，布のもつあたたかさ・柔らかさが子どもたちに安心感を与えることができる。保育の現場では，物語だけでなく，クイズ，歌，安全指導，食育などを題材としたエプロンシアターがさまざまな場面で活躍している。

2, エプロンシアターの作成工程と学生の実態

(1) 題材を選ぶ

教員が提示したテキスト，メディアセンター蔵書のテキストから，学生自身の「裁縫の力」や「演技」「歌」などの得意分野，「乳児向け」「幼児向け」など対象児も考慮しながら，学生自身が題材を決定した。迷っている学生には教員もアドバイスをした。

学生は自分自身に「条件」を出し，その条件に見合った題材を選択し決定した。「条件」には以下のようなものがあった。

- ・作成する人形や背景の数が少ない
- ・仕掛けが多いまたは少ない
- ・物語，歌，手遊びなど自分が決めたジャンル
- ・子どもと掛け合いができるもの
- ・将来就きたい職業（幼稚園教諭か保育士か）による対象児の年齢

(2) ベースエプロンの色の決定

背景となるベースエプロンの色は，ほとんどの学生がテキストと同色を選択していたが，「自分の好みの色」を選択する学生もいた。

(3) 型紙を作り，フェルト地を裁断する

テキストに指示された倍率で型紙をコピーし切り取り，フェルト地にあて裁断する。枚数や方向，効率よく裁断するための工夫など，教員の指導助言のもと実践した。この工程に相当の時間をかける学生が多かった。

(4) 面ファスナー（マジックテープ）の装着

裁断した人形の裏面に面ファスナーを縫い付ける。粘着式のものではなく「縫製用」を用い必ず縫って付ける指示をした。（粘着式ははがれやすい）面ファスナーは固く学生は手こずっていた。縫製にコツが必要であり，そのコツを教員が伝授していった。

(5) 人形の縫製

この縫製には学生の性格が最も反映された。糸を交差しない「かがり縫い」でも出来上がりに影響はないのであるが，「見た目」を気にする学生は糸を交差する「ブランケットステッチ」を用いていた。前段階として「針になかなか糸を通せない」「玉止めができない」「縫い目が揃わない」学生もいたが，指導助言と繰り返しの作業によって徐々に「裁縫の力」は向上していった。

(6) 背景の作成

ベースエプロンに背景を縫う作業は，「手縫い」「ミシン縫い」と作品によって選択し，行われ

た。前期授業内でこの工程まで進めなかった学生がほとんどで春休みに登校しての作業となった。

3, エプロンシアター完成作品



図1 「ともだちいっぱい」



図2 「北風と太陽」



図3 「ねんころりん」



図4 「おおかみと7匹の子ヤギ」



図5 「カレーライス」



図6 「ねんねんころりん」



図7 「はらぺこかいじゅう」



図8 「キレイ大使とバイキン魔王」



図9 「好き嫌いしないよ」

（上記の写真掲載においては、作者の許諾を得ている）

4, 保育園での発表

(1) 2017年4月26日に4名, 同5月24日に4名, 同5月31日に3名, が「西川口くまさん保育所」の園児の前で自分の作品を演じる実践を行った。作品の内容に合わせて「1歳児クラス」「2歳児クラス」「3歳児クラス」「4, 5歳児合同クラス」のいずれかでの実践となった。



図 10



図 11



図 12

(上記の写真掲載においては、本人の許諾を得ている)

(2) 保育園の保育士からの意見

子どもたちが皆, 楽しそうに真剣に学生の演じるエプロンシアターを見ていた。保育士があまり行わない活動であるので, 子どもたちにとって, 新鮮に感じたようであった。また, 学生がとても一生懸命に演じている姿に感動したという言葉, 保育士にとっても良い刺激になったという言葉もあった。さらに, 子どもの目線に合わせた方が良い, 大きく動いた方が良いなどのアドバイスもいただけた。

5, 実演の反省と評価

表1は各学生の自分自身の実演の反省と他の学生が実演を園児と同じ場で見聞きした評価・感想をまとめたものである。

表1 エプロンシアター発表のまとめ（反省と評価）

学生・「タイトル」 実践クラス	自己評価・反省・今後の課題	見学学生の評価、感想
学生 A 図1 「ともだちいっぱい」 2歳児クラス	<ul style="list-style-type: none"> 緊張したが、子どもと目線を合わせて発表できた。言葉が未熟な子どももいて応答が少ない様子もあったが、笑顔で楽しく見てくれているようだった。 動物の登場のさせ方や言葉かけが同じになってしまうことがあり、語彙を増やしていきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 子どもたちは、演者の鳴き声をヒントに答えることを楽しんでいた。 立膝でやったことで、子どもの目線に合っていた。 全体を見回して演じているところが良かった。
学生 B 「チャッピーの大冒険」 4,5歳児合同クラス	<ul style="list-style-type: none"> 途中で人形を落としてしまったり上手く張り付かない所があった。 子どもへの話しかけが少なかった。 背景の位置や流れをしっかりと覚えておく。 	<ul style="list-style-type: none"> 子どもたちは、魚が出るたびに嬉しそうに反応していた。物語は子どもたちが静かに聞くことが多くなるが、参加型であったので違った楽しみ方があることが分かった。 参加型のエプロンシアターをやる時は、子どもの反応をしっかりと受け止めることが大事だと思った。
学生 C 図2, 12 「北風と太陽」 4,5歳児合同クラス	<ul style="list-style-type: none"> 子どもたちの前で演じることはとても緊張したが、だんだん楽しくなってきた。笑顔で演じることができた。 自分が楽しくすることで子どもたちも笑い、マントを脱いだ瞬間驚いた表情を見せてくれた。 キャラクターごとに抑揚をつけるなどの工夫が必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> 役に合わせて声を変えたり、動きを工夫していた。 風や太陽の擬音が面白かった。 一つ一つの流れをもっとゆっくりしていくと良い。
学生 D 図1 「ともだちいっぱい」 1歳児クラス	<ul style="list-style-type: none"> 子どもが興味を持つような導入不足のまま始めてしまった。 最後に動物にタッチしてみるように声をかけると嬉しそうであった。 言葉かけをたくさんして、子どもたちと一緒に楽しむことが大切である。 	<ul style="list-style-type: none"> 立膝をして子どもが見やすいように演じていた。 人形を子どもたちが触ったことにより、より子どもが喜んでいった。 もう少し声に強弱をつけたほうが、より驚きがあったと思う。
学生 E 図3 「ねんころりん」 1歳児クラス	<ul style="list-style-type: none"> 子どもの目線に合わせておこなわなかった。あたふたして囁んでしまうことがあった。 大きな声で演じることができた。 	<ul style="list-style-type: none"> 一つ一つの動物に対して言葉かけをし、楽しそうに演じていたので子どもたちも楽しそうだった。 年齢に合わせ、子どもの目線に合わせる工夫が大切である。

<p>学生 F 図 4 「おおかみと 7 匹の子ヤギ」 4, 5 歳児合同クラス</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・頭の中が真っ白にならないように、たくさん練習しておくことが大切である。 ・人形の出し入れ、しかけの動きに時間がかかってしまい流れが止まってしまった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの問いかけに反応していた。 ・リアクションが大きくてわかり易かった。 ・人形をすぐに出せるようにする。
<p>学生 G 図 5, 10 「カレーライス」 3 歳児クラス</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・手遊びを子どもたちの鏡になるようにすることを忘れてしまった。 ・子どもたちの言葉一つ一つに返事をしながら、ペースを考えながら進めることができた。 ・子どもたちの目線を意識する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・登場する野菜を一つ一つ紹介して始めたのが良かった。 ・演じている途中の子どもたちへの問いかけがあることで楽しい雰囲気が出来上がった。 ・子どもたちも真似をしようと前向きだった。
<p>学生 H 図 6 「ねんねんころりん」 2 歳児クラス</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・アレンジが少なくあっさりと終わってしまった。 ・子どもたちが参加できるような形で進めたほうが良かった。 ・子どもたちが、ふた、ねこと答えてくれ、嬉しかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・もっとセリフに気持ちをこめて演じたほうが良い。 ・淡々とすすめていて、子どもに「楽しさ」を伝えようとする努力が必要であると思った。
<p>学生 I 図 7, 11 「はらぺこかいじゅう」 3 歳児クラス</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・型紙以外の「たまご」を作成したことが良かった。 ・子どもたちの反応が良く、みんなが参加できて楽しかった。 ・エプロンに集中してしまい、子どもの表情を見ることができなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・工夫によってバージョンアップできる作品だと思った。 ・子どもたちに質問して、楽しみながら参加できるようにしていた。 ・きょうりゅうのお腹が膨らんでいくのが面白かった。 ・エプロンの前方に人形を提示する見せ方が良かった。
<p>学生 J 図 8 「キレイ大使とバイキン魔王」 3 歳児クラス</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・導入、まとめが少なかった。 ・虫眼鏡の表裏を間違えたが、流れを止めずに進めることができた。 ・提示の準備を念入りにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「手洗い」「うがい」の動作を楽しく伝えられていた。 ・エプロンの仕掛けがあって楽しかった。 ・子どもたちの言葉に反応し演者が動じずに自信をもって演じる。
<p>学生 K 図 9 「好き嫌いしないよ」 2 歳児クラス</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自分なりに考えた話を最後まで演じられて良かった。 ・最初から子どもが興味をもつような工夫した出し方ができるようにしたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・笑顔で子どもたちに接していた。 ・問いかけを交えながら演じていて、子どもたちも楽しそうだった。

6. おわりに

この実践報告の授業「保育・教育学演習Ⅰ・Ⅱ」は本学においては「ゼミ」と称され、教員の研究テーマについて学びたい学生が集い研究を深めていく授業である。従って、もともと「児童文化財作成」に興味のある学生たちの集団であるので、途中で挫折したり、子どもの前で発表を拒否する学生はいなかった。しかしながら、その過程には11人の個性、特性が現れ、縫製においては教員がほぼつききりになる学生、おしゃべりに夢中で作業が疎かになる学生、私語はほとんどせず黙々と作業に取り組む学生と、様々な姿が見られた。さらに、子どもの前の実演になると、緊張で普段の練習通りに実演できない学生、アドリブを入れ子どもとのやり取りを楽しむ学生、ただただストーリーを台本通りに淡々と演じる学生とこれも様々な姿が見られた。この実践の中で学生たちは、自分と他の学生との関わりの中から「作成に対する取り組み方」「子どもの前で演じること」の具体的な方法を学び、「保育者としての専門性」が少しではあるが、高まったのではと考えられる。この実践で得た学びを現場において活かし、子どもたちの笑顔、歓声を引き出していてもらいたいものである。

参考文献

- 松本峰雄編著『保育における子ども文化』、わかば社、2014年 p.108-109.
中谷真弓著『中谷真弓のエブロンシアターベストセレクションパート2』フレーベル館 2007年 p.2.

（提出日 2017年9月29日）